

白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法 (2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新田, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23821

白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法 (2)

新田 哲夫

1. 前稿のつづきにあたって

本稿は前号に引き続き、石川県白山市白峰（旧石川郡白峰村字白峰）の方言特徴を略述し、記録された昔話3話に対して語学的注釈を加えるものである。

ここでは、前回あげた方言特徴の概要を再掲し、標準語の連体格助詞ノと重なり合うところが多い、この方言の助詞ノ、ガ、ナの意味・用法についてやや詳しく取り上げる。

2. 『白山山麓 白峰の民話』と他の資料

注釈を加える本は、前稿と同様、小倉学・山下鉦次郎編著『白山山麓 白峰の民話』（石川県図書館協会、1963（昭和38）年9月25日発行）である。この本は、会話・地の文ともすべて白峰方言で書かれており、そこではかつての中央語（京都方言を中心とする方言）の古い特徴が多く見てとれる。日本語史を考察する上でも貴重な資料と言える。この本で用いられていることばは、純粋な話しことばそのものとは言えないものの、50~100年前の白峰方言を色濃く伝えるものと考えてよい。

前稿に記したとおり、編著者の一人である小倉学氏は、民俗学者で石川工業高等専門学校教授の職にあった方である。年譜によれば、明治45年金沢市の生まれで、東京府立第四中学（現都立戸山高校）から、國學院大学を卒業後、昭和12年4月には内務省神社局考証課勤務となっている。昭和21年4月石川県金沢第二高等女学校（現金沢二水高等学校）教諭の職に就くまでは、東京在住か生活の拠点が東京にあったようである（「小倉学略年譜」『加能民俗研究』10: 314-315, 1982）。それに対して、もう一人の著者の山下鉦次郎氏（1895-1970）は白峰の生え抜きで、金沢での入院生活を除いては、ずっと白峰に住んでおり、父母祖父母とも白峰の方である。この本の白峰方言は、山下鉦次郎氏自身の方言を写したものと考えてよい。小倉氏のこの本での役目は、鉦次郎氏が記した傳承を、なるべくもとの特徴を保存する形で校閲したことに留まると見られる。

鉦次郎氏には、いくつか民俗学的な著作がある。その中で、白峰方言に関する記録で、氏が関わっているものには、以下のものがある。

- (a) 岩井隆盛「白峰（牛首）方言概要」（『白峰村史 下巻』白峰村役場、1959（昭和34）年、276-321）

- (b) 『広報しらみね』1～20（白峰村役場、1964(昭和39)年7月15日～1966(昭和41)年3月25日)
- (c) 山下鉦次郎『山下忠治郎家諸雑事記』（1965(昭和40)年、私家版）
- (d) 小倉学編『全国昔話資料集成4 白山麓昔話集』（岩崎美術社、1974(昭和49)年）

(a) の岩井論文には「山下鉦次郎氏の『牛首の挨拶』」の一節がある。岩井氏が鉦次郎氏より受け取った原稿をほぼそのまま掲載したものである(276-286頁)。このあいさつことばの記録は、岩井氏の方言記述において、用例や語例などの具体例を提供している。

(b) は『広報しらみね』に連続掲載された昔話17話である。本稿で使用しているテキストの出版後の掲載であり、内容は全く同一である。

(c) は鉦次郎氏の父母祖父母や一族の詳細な記録と自身一代記を記したものである。雁山(ガニヤマ)という土地で焼畑農耕を営んでいた時代の記録も含まれ、民俗学的にも価値のある資料である。謄写版刷りで限定100部印刷された。その中に、会話の部分が多数含まれており、この部分が白峰方言で描かれている。以下はその一例である。

- (ア)「今年や、きやなよい日ばっか続いて、もう雪は降らんじや。あんまれよい日が続くので、土産に酒かんで遊びに来た。忠治郎の衆等もしやに慌てんと、一ぷくして酒でも飲んでくれ。まさかあした雪も降るまいざい」。
- (イ)「わっら、毎年家へ来て巣をかけっちやさかい、明年[みよに]は何か土産物を持ってきてくれえよう」。
- (ウ)「おいまた来たこ。忘れんとよう来たにや、土産物を忘れんと持って来たこ」。
- (エ)「これが土産物かわれ。よろしいよう。ばばこれを植えてみよわい」。

(d) は鉦次郎氏の死後出版された『白山山麓 白峰の民話』の新版である。『白山山麓 白峰の民話』の白峰村白峰の昔話のほか、白峰村赤岩の昔話20話、尾口村深瀬15話、尾口村東二口25話が増補されている。鉦次郎氏による白峰村白峰の昔話に比べると、他の赤岩、深瀬、東二口の昔話には、全般に加賀一般の方言特徴しか見られない。これは上記3地域が加賀一般に見られる共通特徴を有し、白峰方言こそが特殊であることを示すものとも取れるが、むしろ、方言そのものを正確に写し取る描写力の違いが現れたとも考えられる。白峰の昔話では、鉦次郎氏の優れた筆力が方言に対しても存分に発揮されているといえよう。また、この書は、旧版の『白山山麓 白峰の民話』を正確に写していない部分もある。前稿16頁にあげたものの他に、今回、

「ちょこつとも年が寄っちよらじゃって」(旧版146頁)

「ちょこつとも年が寄っちよらんじゃって」(新版201頁)

のように、旧版にない「ん」を入れたものも見つかった。動詞未然形にジャが直接接続す

る形式は、白峰方言の特徴の一つであるが、新版では、それを見えなくしている。

3. 注釈作業と記述調査の協力者

昔話の語学的注釈作業には、竹トシエさん（1925年生まれ）と山田喜一さん（1933年生まれ）の協力を得た。また後の連体助詞については竹トシエさんの他、加藤継満津さん（1923年生まれ）、山口甚太郎さん（1922年生まれ）、織田清勇さん（1928年生まれ）、山田秀雄さん（1930年生まれ）の協力を得た。

4. 白峰方言の諸特徴

白峰方言の主たる特徴は、西日本的であり、同じ石川県の加賀・能登や福井県の奥越方言と共通している。例えば、否定の ン （行カ ン 《ない》）、存在の動詞 オル （《いる》）、否定過去の ナンダ （行カ ナンダ 《なかった》）、ハ行四段動詞のウ音便（ コ ニ タ 《買った》）、形容詞ク活用ウ音便（ ア ニ コナル 《赤くなる》）、指定辞の ジャ ・ ヤ （雨 ジャ 、雨 ヤ 《雨だ》）、理由の接続助詞 〜サカイ などがそうである。

しかしながら、それとは別に、以下に列挙する特徴を有している。これらの特徴のほとんどは、周りの方言には見られないもので、白峰を「言語の島」と呼ぶのに十分な数である。

前稿で挙げたものを、以下本稿でも再掲する。ゴシックで示されたものは、これまでの岩井隆盛（1959, 1962）などでは報告されてこなかった特徴である。前稿では明朝体のボード（太字）で示したが、印刷された紙面では、非ボードとの区別がつきにくい仕上がりになってしまった。再掲するのはそのためである。ひらがなで引いた用例は昔話によるもの（該当語形は下線）、カタカナは話者が例示したものと NHK『全国方言資料』（以下の 2n の例）である。また、報告はあるものの、白峰でも古い特徴となり、現在では使用されていない可能性があるものは、ダガー（†）を付した。なお、アクセントは H「高」、M「中」、L「低」、F「降」を表す。

今回の再掲に当たって、書き落としのあった(3c)を加え、見出しを「4.3 形容詞」から「4.3 形容詞・形容動詞」に変更した。以下これについて、説明を補う。

白峰方言の形容動詞終止形はシズカナ《静かだ》のようにナで終わる。形容動詞終止形語尾がナの方は、全国的には中四国を中心に九州を含めた西日本に分布し、北陸でも山間部と奥能登に散見する（『方言文法全国地図』3, 145 図「静かだ（終止形）」）。この特徴は、歴史的には、ナリ活用形容動詞連体形ナル（例：静かナル）の末尾のルを落としたかたちで、室町期には連体形だけでなく、終止形にもこの形が使われるようになり、江戸前期には指定の助動詞 ジャ も活用様式に加わった（土井忠生・森田武 1975: 112-113, 170）。白峰方言では、 ジャ 導入以前のナリ活用使用の特徴を保存している。また、この方言の形

容動詞の否定形もシズカニナイのようなナリ由来の形式を用いる。このような否定形にニを用いる全国分布は、広島県を中心に分布するが、その範囲は「静かだ」の終止形にナを用いる分布より、ずっと狭くなっている(『方言文法全国地図』3、147 図「静かでない(否定形)」。北陸では、富山県に「静かンない」が2地点あるのみで、「静かニない」は、珍しい例である。

なお、再掲にあたって諸特徴の表現をわずかに手直したのものもあるが、実質的な内容に変更はない。

4.1 音声・音韻、アクセント

- (1a) 「ツ」の音が摩擦の少ない破擦音 [t^su] で現れる。
- (1b) サ行音のサスソの子音に[θ]、ザ行音ザズソの子音に[ð]が現れる。
- (1c) 下降式アクセントが第1類名詞・動詞に現れる。例：かたち MHM、並ぶ MHM。
- (1d) 動詞アクセント第2類で一段動詞「下げる」、五段動詞「動く」等がともに HLL で現れる。
- (1e) 動詞・形容詞アクセントの第1類と第2類の区別が連用形(動詞ではテ形で後に何か続く形、形容詞ではナル形)で現れる。例：1類ナロンデ(並) MHMM…/2類サガッテ(下) LHHH…; 1類アーコナル(赤) HHMMM / 2類クーロナル(黒) HHHHH。
- (1f) 複合動詞アクセントが音調上2単位で現れる。例：キーコム(着込む) HLMM、ミーナオス(見直す) HLMLL、トビコム(飛び込む) HLMM、トビノル(飛び乗る) HLMF。

4.2 動詞、助動詞など

- (2a) マ行バ行四段動詞にウ音便をもつ。例：ヨ一ダ(読んだ、呼んだ)、ヨロコダ(喜んだ)。
- (2b) サ行四段動詞のイ音便がない(北陸はほとんどがサ行イ音便)。例：出シタ、離シタ。
- (2c) 動詞未然形+〜デ(〜しないで、なくて)の用法がある。例：見つからでよかった(見つからないで良かった)。
- (2d) 1音節語幹動詞に長音が現れる。例：ミーヨ(見よ)、キーコム(着込む)など。
- (2e) 授受動詞で無視点的クレルがある。例：何もくれる物はない(あげる物はない)。
- (2f) 「いる、来る、行く」の尊敬表現、「ある」の丁寧表現でゴザルを用いる。
- (2g) ゴザルは尊敬・丁寧の補助動詞でも用いる。例：書イテゴザル(「書いている」の尊敬)、シャンデゴザル(「そうだ」の丁寧)。
- (2h) 尊敬形式には〜ッシャル・サッシャルが用いられ、〜レル・ラレルは用いられない。例：言ワッシャル、見サッシャル、サッシャル(「する」の尊敬)。
- (2i) 意志・推量のウが一段動詞でオ段拗音となって現れる。例：見ヨ(一)、起キヨ(一)、

上ギヨ(一)、調ノヨ(一)。

(2j) 意志・推量のウズも用いられる。例：書コ(一)ズ、見ヨ(一)ズ、起キヨ(一)ズ、上ギヨ(一)ズ、調ノヨ(一)ズ。

(2k) アスペクト形式「～ている」が～ Chol・Jolの形をとる。動作動詞の進行相、変化動詞の結果相を表す。例：見Chol、歩イChol、死ンJol、読ーJol。

(2l) 可能表現で～エルが用いられる。これは「完遂」の意味である。例：一晚デ コノ本 読ミエタ。／読ミエナンダ。

(2m) ジャ、ヤは名詞のほかに、動詞形容詞の終止形、動詞のテ形、未然形に直接接続し、アスペクトの対立をみせる。例：降ツタヤ、降ツテヤ、マダ降ラヤ。また、ジャ・ヤは用言に接続したとき、ほとんどが「のだ」の意味である。

(2n) 連体形の体言用法がある。すなわち、準体助詞が未発達のものが見られる。例：マイルガ カンニョヤニヤー（お寺に参るのが肝要だね）。

(2o) †自発の形式と見られる「未然形+ル」の形があった。例：お前ら聞かったか、おとろしやア。／初めの間は、(餅が) 大変よう蒸さったいけつと…昼からもう蒸さらんようになつたとお。／一服しちよと、トロトロ眠れてしまいました。

(2p) †二段動詞の残存がみられた。例：アクルジャツタナー（あけるのだったなあ）。

(2q) †助動詞タリの連体形の残存がみられた。例：入れタルこと（入れたこと）。

4.3 形容詞・形容動詞

(3a) 形容詞の語尾が母音の融合した形で現れ、3拍形容詞では語幹に長音が現れる。例：ターキャ（高い）、サービ（寒い）、オボチャ（重たい）。

(3b) 形容詞テ形+オルの形があり、一時的状態を表す。例：サビシテオツタ（寂しくしていた）。

(3c) 形容動詞の活用形が標準語と異なり、終止形は～ナで終わる。例：静カナ（終止、連体）、静カニナイ（否定）、静カニナル（連用）、静カナラ（条件）。例：親父は初めから変なと思ちよつたいさかい…。

4.4 助詞

(4a) 所有を表す助詞ガとノの両方をもつ。例：ギラガ足（私の足）、先生ノ帽子。

(4b) 場所を表す助詞ナをもつ。例：ソコナ家（その家）、向キヤナ山（向かいの山）。

(4c) 理由を表す助詞～サカイのほかに～デがある（ノデではない）。サカイは理由の他に、単なるきっかけを表す助詞で、明確な理由を述べる場合はデを用いる。

(4d) 提題の助詞「は」は～アで現れ、前の名詞の末尾と融合する。例：ソリヤー（それは）、ギラー（私は）。古くは～ヤも現れる。例：いね（母）ヤどこへ行ったなら。

4.5 名詞、その他の語彙

- (5a) 1人称はギラという語である。2人称はワレ、ワイである。他に†ヌシがあった。
- (5b) 標準語1拍名詞は長音で現れる。例：キー（木）、コー（子）、テー（手）など。
- (5c) 複数を示さない「ぼかしの意味のラ」がある。例：ギララ（わたしなど）、アズキラ（小豆など）。
- (5d) 接尾辞メがつく生き物の名詞が多数ある。例：クマメ（熊）、ハットメ（鳩）、ドンボメ（とんぼ）など。
- (5e) 名詞に標準語にはない長音、撥音がみられる。例：オーケ（桶）、ナーベ（鍋）、ソーレ（櫓）、ノード（喉）、カンゲ（影）、†ニョージ（虹）、フターツ（二つ）。
- (5f) 古語（かつての中央語）に直接結びつき、現代中央語では見られない語彙が多数ある。例：アシコ（あそこ）、アレ（自分）、イネ（母、妻）、カタ（方角）、ノミゴクラ（飲み競い）、コンゾ・コゾ（去年）、†ナイ（地震）、ベチ（別）；ゴーフカス（腹を立てる、<業が沸く>）、ガオル（感服する、<我を折る>）；ショーワイ・†ショーファイ（塩辛い、<しほはゆし>）、ヘタブシノヨイ（恐れを知らぬ、<ひたぶりなり>）、アラケノ（力強く、<あらせなし>）など。

4.6 文末詞、他

- (6a) 文末詞ツケがあり、「思い出し」のほかに「報告」の用法がある。例：アンサワ勉強シチョッタツケ（兄きは勉強していたよ）。
- (6b) 否定疑問の確認要求形式ザイ、†ザレ（～じゃないか）がある。例：われが手じゃって、なお毛だらけじゃざい。／爺、どこじゃ、どこじゃ。何もおらんざれ。
- (6c) 疑問語疑問文では文末詞ナー（古くは†ナラ）が用いられ、真偽疑問文では文末詞コが用いられる。例：ドコエ行クナ一（どこへ行くのか）。われがそこには何があるなら（お前のところには何があるのか）。金沢エ行クコ（金沢へ行くのか）。
- (6d) 間投助詞シテを用いる。例：モー シテ シカタガ ゴザランワイ（もうっ、仕方がないですよ）。
- (6e) 間投助詞「ね」の意味でニャー用いる。ニャーは文末詞としても用いる。†古くは文中ではナイを用いた。また、ほぼ同じ意味の丁寧な文末詞ノーがある。例：よかったニャー。／それでナイ…（それでね…）／毎度ありがとーござりましてノー。

5. 連体修飾ノ、ガ、ナ

前稿では、文法記述の一部として、この方言に特徴的な、「指定辞のジャ（ヤ）」、「疑問文の文末詞」、「敬語ゴザル」に関して述べた。前節にあげた特徴の番号ではそれぞれ、(2m)、(6c)、(2f, 2g)である。本稿はそれに引き続き、いわゆる連体格助詞の文法的特徴に関して

記述を行う。先の番号でいうと、(4a, 4b)である。

この節では、連体修飾[NP1+助詞+NP2]_{NP}の構造で用いられる助詞ノ、ガ、ナに関して述べる（以下、NPは名詞句、Nは名詞）。標準語の連体修飾[NP1+助詞+NP2]_{NP}では、助詞はノがもっぱら用いられ、所有のほか、名詞句どうしの様々な関係を表すが、白峰では、ノ以外に、ガ、ナがあり、それぞれ限定された意味・用法をもつ。ここでは、上記の修飾構造うち、NP1の主要部をN1、NP2の主要部をN2とおき、N1とN2のそれぞれの意味特性と両者の関係について見ていく。

白峰方言の助詞ノ、ガ、ナの概要を示せば、ノはほぼ標準語と重なり広い用法をもつが、ガは所有の用法が主で、N1が所有者、N2が所有されるものを表す。また、N1は人間を示す名詞だけがくることができる。一方、ナは場所を表し、主にN1が場所、N2がN1に存在するものを表す。

こうした状況は、茨城県水海道方言と似ている（佐々木冠 2004: 26-43）。水海道方言が白峰方言と異なるのは、連体修飾「N1 ガ N2」の形式では、N1は人間だけでなく、動物などの他の有生の（animate）名詞をとることができ、N1の意味特性の制限が緩く段階的であることがあげられる。「N1 ナ N2」の形式では、逆に、白峰と比べて、N1に一般名詞をとることができないなどの意味特性の制限があることがあげられる。

また、真田信治（1990: 261-272）には、同じ北陸地方の富山県五箇山郷の連体格助詞ガ、ノに関して、詳細な報告があり、そこでは「N1 ガ」ではN1が人間名詞だけに用いられ、ノと待遇的表現上の差異があることが示されている。

以下で示す用例は、協力者の作例が多く含まれている。これらはカタカナで記す。「*」のアスタリスクは文法的に不適切な文であることを示す。また、後の注釈を加える『白山山麓 白峰の民話』の昔話からも例をとった（用例は「本書セクション番号、タイトル、頁」の順で示す）。《 》は意味を表し、(カタカナ)は俚言の読みを、(ひらがな)はその他の注を示す。白峰の民話の資料に加えて、日本放送協会編『全国方言資料 第3巻 東海・北陸編』に納められた「4 石川県石川郡白峰村白峰」のテキストからも一部とった（NHK～頁と略）。NHKの具体的資料はカタカナで表記する。

5.1 所有のガ

5.1.1 N1の性質

白峰方言ではガはN1が人称詞、再帰名詞、親族名詞、職業名、個人名などの人間を指す「人間名詞」に限って現れる。ガが現れるところでは、ノも現れることができる。

- (1) ギラ ガ／ノ イエ 《私の家》
- (2) ワレ ガ／ノ イエ 《おまえの家》
- (3) アレ ガ／ノ イエ 《自分の家》

- (4) ノノ ガ／ノ イエ 《爺さんの家》
- (5) トッサ ガ／ノ イエ 《父さん（家長）の家》
- (6) ムスコ ガ／ノ イエ 《息子の家》
- (7) オヤッサマ ガ／ノ イエ 《親っ様（地主）の家》
- (8) センセー ガ／ノ イエ 《先生の家》
- (9) タロー ガ／ノ イエ 《太郎の家》

しかし、N1 が人間を指さないときには、ガが現れず、ノだけが現れる。

- (10) ウシメ *ガ／ノ アシ 《牛の足》
- (11) ニョコメ *ガ／ノ アシ 《猫の足》
- (12) ムシメ *ガ／ノ アシ 《虫の足》
- (13) ナスビ *ガ／ノ トゲ 《茄子の棘》
- (14) イス *ガ／ノ アシ 《椅子の足》
- (15) フクロ *ガ／ノ クチ 《袋の口》

N1 が人を表すダレ《誰》、ダレサマ《どなたさま》のような不定でも、ガが現れる。

- (16) コレヤ ダレ ガ／ノ ボーシナー 《これは誰の帽子か》
- (17) コレヤ ダレサマ ガ／ノ ボーシナー 《これはどなたさまの帽子か》

5.1.2 N1 への敬意の有無

「N1 ガ」のガは、N1 が定不定問わず、人間を示す名詞に付くことを確かめた。この場合ガとノは併用で現れる。ガとノが両方出現する方言、すなわち九州西南部の範囲と（『全国方言文法地図』1、13 図「おれの（手拭）」、14 図「先生の（手拭）」）、富山県五箇山方言（真田 1990）では、ガとノは N1 に対する待遇的な異なりの反映とみられている。白峰方言でも両者の待遇的な差が問題となる。

白峰方言に関しては、両者の違いは、N1 に対する敬意に関わる待遇的な差ではなく、親しみのある表現とそうでない表現、あるいはそこから生じる「丁寧さ」の差となって現れる、というのが結論である。「N1 ガ」が「ジゲ（地元）のことば」、「N●●」が「丁寧なことば」という話者の内省である。だが、実際は、「ガ《ぞんざい》」対「ノ《丁寧》」、という排他的な関係があるのではなく、ガの出現の傾向のみがスタイルに左右される。方言を使用し、改まらない場面ではガが多用され、逆に改まった場面ではガは使用されない傾向にある。一方、ノは方言使用の場合でも、あらゆる場面で使用可能である（後述のアレガ《自分の》を除く）。

「N1 ガ」の使用が「丁寧さ」と関係することは、(16) のダレ ガ ボーシナー《誰の帽

子か》が乱暴に聞こえる、という一部の話者の報告にも現れている。また、(17)の例で、ダレサマ *ガノ ポーシナー《どなたさまの帽子か》のようにダレサマガを不適切と判断する話者も一部いる。ガの使用が文法的には可能であっても、ダレサマを用いるような改まった場面を想定するとき、ニュートラルな「N1 ノ」が適切と判断するのであろう。

「N1 ガ」と「N1 ノ」が N1 に対する敬意の有無と関係ないことは、まず、(1) ギラノ イエ《私の家》が可能であることに現れている。また、尊敬すべき相手、(7)「オヤッサマ」、(8)「先生」などにも「N1 ガ」が可能であることに現れている。

(18) マー イマノ ギララノ クラシワ ジューロエモンノ ダンナサマガ クラシ
ミタイナモンジャ。《まあ、今の私らの暮らしは、十郎右衛門の旦那様の暮らしみたい
なものだ》(NHK136 頁、本文改訂)

この地域でもっとも権威のある大庄屋の山岸十郎右衛門家当主（他の地主がオヤッサマと呼ばれるなかで、特別にダンナサマと呼ばれている）に対してもガが使用されている。話者によれば、「先生ノ家」、「オヤッサマノ家」ということが多いが、「先生ガ家」、「オヤッサマガ家」を使用しても、先生、オヤッサマへの敬意に変わりはないし、本人の前で使用しても、そのこと自体失礼にならないという。

結局、この方言のガの実際の出現傾向は、発話スタイルと関わっているが、その文法的な判断は、N1（と N2）の狭い意味での言語的意味特性がもっとも重要な要素であるといえるであろう。

5.1.3 N1 と方言語彙

「N1 ガ」が改まらない場面で多用されることは、N1 が方言の人称語彙（1 人称詞ギラ、2 人称詞ワレ）、方言の親族名称（トト・トッサ《父（家長）》、ノノ・ノンサ《爺》など）のとき出やすい傾向と一致する。昔話からギラガ《私の》の例をとると以下のように、多数ある。

(19) 棚からでかいな鼠（ネズメ）や飛んで出て、私（ギラ）が胸へ飛びついて、(28 五郎物語 79 頁)

(20) お婆、どうじゃ、私（ギラ）が身体がどこも見（メ）えんこ。(49 隠れ蓑と隠れ笠 119 頁)

(21) 私（ギラ）を爺さが禪のなかへ入れて、(57 日本一の屁こき爺さ 142 頁)

(22) 私（ギラ）が仲間もでかいことおるし、(33 ムジナ八右エ門 99 頁)

(23) いや、嘘ではござらん。私（ギラ）が家のもんや金を借った家の人にも聞いてくだされ (19 死人の握った金 53 頁)

一方、ギラノは一例のみ見つかっている。

(24) 私 (ギラ) の祖母 (オババ) は、その白州で裁判しるのを見たって何べんも話してくれたもんじゃ。(21-4 山岸家小話、裁判の話 59 頁)

トッサ《父さ、家長》、ノノ《爺》、バーサ《婆》等の例も見つかる。

(25) しゃんじゃ、家 (いえ) の父さが目を良いに治す薬じゃわい。(60 チャックリカキフウ 149 頁)

(26) コガネジャックリ、ジャックリ、ノノガカネカネ (57 日本一の屁こき爺さ 142 頁)

(27) 「おうい、しゃんか、しゃんなら早よ食おう。」ちゅうて婆さがとこへ下りて来たいて。(31 鼠の穂がち 90 頁)

一方、固有名詞は昔話では次の二例のみである。

(28) そこな棚からでかいな鼠 (ネズメ) が一匹飛んで出て、小次郎が胸へ飛びつきたいって。(28 五郎物語 79 頁)

(29) その炭焼は知らん人かと思 (モ) たら、ちょうど顔見知りの五郎が炭釜じゃったもんで。(28 五郎物語 82 頁)

他方、この方言に特徴的な再帰名詞アレ《自分》の場合は、アレガの形が自然で、アレノは不自然という。これは複数の話者の一致した意見である。本稿で取り上げる『白山山麓 白峰の民話』でも、所有のアレガが 15 例見いだせるが、アレノ《自分の》は 1 例もない。所有のアレガはその形で固定化しているが、再帰名詞アレ《自分》自体は独立性を失っているわけではない。アレは所有のガ以外に、アレニ《自分に》、アレデ《自分で》、アレオ《自分を》、アレガ《自分が (主格)》、アレヤ《自分は (主題)》など、自由に助詞が接続することができる。次はアレヤの例である。

(30) こないだ、私 (ギラ) 爺に言わんと行つたで、今日は、自分 (アレ《爺を指す》) や早よもどつたいにや (22 ヤブノノ爺さ 63 頁)

アレ《自分》の照応に関する問題については、別の機会に論じる。

5.1.4 N2 の性質および N1 と N2 の関係の例

「N1 ガ N2」のなかでの N2 の性質を考えると、N2 の意味特性のみを取り上げるよりも、N1 と N2 の関係を扱いながら N2 の性質を見る方が方法の上で容易である。

標準語の「N1 ノ N2」における N1・N2 の関係は多様で、ノの用法の分類も多様である

が、ここで取り上げる白峰方言の「N1 ガ N2」の N2 には、次のような意味・用法で現れる。

- (31) ギラ ガ／ノ アシ 《私の足》(N2 が N1 の身体)
- (32) ギラ ガ／ノ マゴ 《私の孫》(N2 が N1 の親族)
- (33) ギラ ガ／ノ カサ 《私の傘》(N2 が N1 の持ち物)
- (34) ギラ ガ／ノ トナリ 《私の隣》(N2 が N1 との位置関係)
- (35) ギラ ガ／ノ タメニ 《私のために》(N2 が形式名詞)
- (36) ギラ ガ／ノ タノミ 《私の頼み》(N1 が N2 の行為の主体)
- (37) ギラ ガ／ノ シンパイ 《私の心配》(N1 が N2 の行為の主体)
- (38) ギラ ガ／ノ アシアト 《私の足跡》(N1 の行為の痕跡)

上記(31)～(38)はノのほか、ガが可能である。ガは分離不可能な所有のほか、分離可能な所有の場合も用いられる。

5.1.5 N2 の性質 (位置関係、形式名詞)

(34)のように N1 を基準とした位置関係を示す N2 にも用いられる。

- (39) その家へ飛んで行って、婆さが側へ行ってない、(4 バセルにぼわれて 26 頁)
- (40) もう見(メ) えんようになった爺(ノノ) が後を追いかけたいとお。(22 ヤブノノ爺さ 65 頁)

「N1 ガ N2」の N2 が、(35)のように形式名詞にも付く。N1 ガタメニのほか、N1 ガヨーニ 《のように》も可能である。また(34)の位置関係と重なるが、昔話では～ガトコ 《の所》の例も多く見いだせる。

- (41) 「おうい、しゃんか、しゃんなら早よ食おう。」ちゅうて婆さがとこへ下りて来たいて。(31 鼠の穂がち 90 頁)
- (42) 自分(アレ) がとこへいってしまいたいとお。(37 ムジナめと猿め 108 頁)

5.1.6 N1 と N2 の関係 (同格)

上では現れる場合を列挙したが、いわゆる同格の場合には、ノのみでガは用いられない。

- (43) コレア マゴ *ガ／ノ サトシヤ 《これは孫のさとした》
- (44) アノシトワ ソンチョー *ガ／ノ ナガイサンジャ 《あの人は村長の永井さんだ》

標準語には、上記用法のほかに「材料の限定（煉瓦の家）」、「全体と部分（椅子の足）」などの用法があるが、「N1 ガ」の N1 が人間名詞に限定されるために、適切な用例は見つからなかった。

5.1.7 N2 の項となる要素

特に(36)、(37)でガが可能であることは、N2 が意味上の項 (arguments) を想定できる場合に、それらの項の格形式がどうマークされるかという問題と関連がある。

標準語の「N1 ノ N2」の N2 が名詞でありながら、意味的な行為・心理の主体や客体が N1 ノの形式で現れるものがある（詳細は寺村秀夫 1991: 240f）。水海道方言ではこうした文法関係がガ・ノの選択に関わるという（佐々木 2004: 39）。次の(45)は、水海道方言の例である。

(45) ozi:tsjaN-nga mango {-no/*-nga} sjtske
おじいさん-所有 孫 {-属/*-所有} 躰 《お爺さんの孫の躰》

ここでは主語的要素は所有格 (-nga) で、目的語的要素は属格 (-no) でマークされている。一方、白峰方言では、以下のようにになっている。

(46) ギラ ガ/ノ ニューインオ ヒトニ シャベルナ 《私の入院を他人に喋るな》
(私が入院する 主語的要素)

(47) マゴワ ギラ ガ/ノ モリガ キニイラン 《孫は私の守りが気に入らない》
(ギラがマゴを守りする 主語的要素)

(48) マゴ *ガ/ノ モリオ センナラン 《孫の守をしなければならない》
(ギラがマゴを守りする 目的語的要素)

(49) ヨメワ ギラ ガ/ノ マゴ *ガ/ノ モリガ キニイラン 《嫁は私の孫のお守りが気に入らない》
(ギラが 主語的要素、 マゴを 目的語的要素)

「N1 ノ」は全てに使えるため、それを除いて見ると、「N1 ガ」が自動詞・他動詞の主語的要素に使えるが、「モリ《守り》」の被動作者（目的語的要素）のとき使えず、「N1 ノ」としなければならないことがわかる。自動詞文の主語を S、他動詞文の動作主を A、他動詞文の被動作者を O と置くと、この方言の名詞句内の連体修飾の文法関係の格表示は次の二つのタイプを取っていることになる。

(50)
S = A (-ガ) ≠ O (-ノ) : 対格型
S = A = O (-ノ) : 中立型

自動詞文の主語 S と他動詞文の動作主 A が同じ形式の格にマークされ、O だけが異なっているのは「対格型」と呼べるものである（別に、区別のない「中立型」が併存する）。こうした格表示の区別が、連体修飾を含む名詞句内で見られる点については、単文や名詞にかかる関係節内の格表示との関係を調べる必要があるが、これに関しては別稿に譲る。

5.2 場所のナ

この方言の「N1 ナ N2」について述べる。ナは歴史的には「～ナル」のルを落とした形で、中央語の中世から近世の文献にも見いだせるが、共時的にはナは名詞に接続する助詞の一種とみてよい。ナの主な機能は、「N1 に存在する N2」という N2 の存在場所を示すことである。N2 には意味的な制限はないが、N1 については現れる名詞に制限がある。

一方で、場所を示す「N1 ノ N2」の形式も全てにおいて可能である。以下に、昔話からの「N1 ナ N2」の例をあげる。

5.2.1 N1 が指示詞

まず、(51)～(54) で N1 がいわゆる指示詞の場合をあげる。(54) のように方向を示す場合もある。昔話から例を引く。

(51) そこな大阪の者が (1 三人のテンボつき 19 頁)

(52) そこな細い木の棒で草原のなかをポンツとつくと、(22 ヤブノノ爺さ 62 頁)

(53) あしこな牛小屋の七番目の小屋にまっ黒い牛めが一匹おるさかい、あれを裏な庭へてえて《連れて》行って、(56 ナンベン三日に給金三百両 134 頁)

(54) あつてな道や、こつてな道へ出て来ては、(3 新保狐 22 頁)

5.2.2 N1 が相対的位置関係

次のように N1 が相対的な位置関係を示す名詞の例も多く見られる。

(55) 行手の前な藪のなかから、でかい狐めが一匹道のなかへ飛んで出て、道の端な古草鞋を片一方捨て、(3 新保狐 22 頁)

(56) 紙袋のなかな蜂めを追いこだい《追い込んだ》とお。(62-1 ブツと和尚様、智恵だめし 155 頁)

相対的位置関係を表す名詞で「N1 ナ」のかたちをとる N1 には以下のものがある。

(57)

マイ《前》、ウシロ《後》、カタ《方(方向)》、ココ《ここ》、ソコ《そこ》、アシコ《あそこ》、ドコ《どこ》、コツテ《こつち》、ソツテ《そつち》、アツテ《あつち》、ドツテ

《どっち》、テマイ《手前》、ムキヤ・ムコー《向こう》、ヒダリ《左》、ミギ《右》、カミ《上》、シモ《下》、ナカ《中》、ハズレ《外れ》、スミ・スマ《隅》、オモテ《表》、ウラ《裏》、ソト《外》、オク《奥》、ヘリ《縁》、フチ《縁》、キワ《際》、チカク《近く》、トーク《遠く》、グルリ《ぐるり》、アタリ《辺り》

これらの名詞は「N1 ナ N2」のかたちではなく、さらに N1 を修飾する要素が付くことが多い。「N1 ナ N2」の N1 の前に付く名詞を N0 とおくと、「N0 ノ N1 ナ N2」（例：道の横な藪）のかたちをとる。話者によれば、「*N0 ナ N1 ナ N2」、「*N0 ナ N1 ノ N2」は不自然といい、また、昔話でも例を見いだすことができない。N0 が人間名詞の場合は、「N0 ガ N1 ナ N2」は可能であるという（例：ぎらガ隣ナ席《私の隣の席》）。

N0 は、一般に相対的位置関係を示す N1 の基準となる所（例：家ノ左ナ木《家の左の木》、家は基準、左は位置）、または N1 という部分に対する全体を指す所（例：川ノ縁ナ水《川の縁の水》、川は全体、縁は部分）等を表す。また、N1 がカタ《方》のときは、「基準・位置」や「全体・部分」というよりも、N0 の方向の指示内容と一緒に、具体的な方向を表す（例：上ノ方ナ家《上（川の上流）の方向の家》）。

このような N0 と N1 の関係の場合、「場所」のナではなく、「二つの N を結びつける」ノが用いられる。

(58)

N0 (基準) ノ／(ガ) N1 (位置) ナ N2 (例：家ノ左ナ木、ぎらガ隣ノ席)
 N0 (全体) ノ／*ナ N1 (部分) ナ N2 (例：川ノ縁ナ水)
 N0 (指示) ノ／*ナ N1 (方向) ナ N2 (例：上ノ方ナ家)

相対的位置基準の名詞のなかでカタ《方》は、N1 でも N2 でも可能である。（例：カミナカタ《(川の) 上の方》、カミノカタナウチ《(川の) 上の方の家屋》）。カタ《方》を使う名詞句の構造は次の(59)、(60)のようになる。

(59)

[N1-助詞 N2] NP2-助詞 V
 [カミ-ナ カタ] NP2-エ イク

(60)

[[N0-助詞 N1] NP1-助詞 N2] NP2-助詞 V
 [[カミ-ノ／*ナ カタ] NP1-ナ ウチ] NP2-エ イク

この例からもわかるとおり、名詞につく「ナ」は、NP2 の主要部である N2 (下線部) の前にあるとき現れることができ、その前の NP1 中の N0 と N1 をつなぐところでは現れ

ない。こうした原則は、(57)であげた相対的位置名詞一般に当てはまるものである。

5.2.3 N1 が一般名詞

次に、「N1 ナ」の N1 が一般の名詞に付く場合である。昔話からはいくつか拾うことができる。

- (61) 佐保や、今日はあの馬小屋な赤馬を、島のオモヤまで引いていってくれ。(25 佐保が鴉ヶ谷行き 70 頁)
- (62) オミヤ《居間》な帳面箱から父(トト)が大切な帳面紙(ちょうめんがみ)を盗んできて、(28 五郎物語 76 頁)
- (63) ドタドタとあばれちよる幽霊の手足を、腰な細引きでしっかりしばりつけて、寺の前な柳の木へくりつけてしもたいとお。(56 ナンベン三日に給金三百両 140 頁)
- (64) ブツはその手をひん握って、背戸なお花畠へ飛んでいって、(62-2 ブツと和尚様、和尚様と屁 157 頁)

ただし、次の例は、先の相対的位置を示す名詞と一般名詞の中間的な性格をもつ。

- (65) そのはずみに、前な石な《(家の) 前の石》の上(イエ)へいやというほど、あらかの《強く》嘴をがちつけて、(34 川瀬にだまされた兎 104 頁)
- (66) 一番二人でとってみまいかって言う話になって、外な板《(家の) そとの板》をひくところへ出て、(7 長太郎とムジナ 31 頁)

上記の(65)、(66)の「前」、「外」は、それぞれ「家の前」、「家の外」という具体的な場所を指す。

いずれにせよ、こうした一般名詞にナがつくのは、同じ場所のナをもつ水海道方言と異なる点である(佐々木 2004: 35、ただし、同じ水海道方言を記述する宮島達夫 1956 では、「山ナ～」が可能であり、食い違いが見られるという)。

昔話の場合は(61)～(64)の一般名詞につくナが可能であったが、現在の話者においては、これらは「N1 ノ」の方が自然という。白峰においては、一世代前の用法と言えるものであろう。

5.2.4 N1 が具体的な地名

N1 が具体的な地名の場合、「N1 ナ」のかたちはとれない。これは水海道方言と共通した特徴である。

- (67) オーミッタン *ナ/ノ ガッコー《大道谷(地名)の学校》
- (68) ミョーダン *ナ/ノ ハツデンジョ《明谷(地名)の発電所》

(69) 谷峠の頂上に着いてホッと一息ついただいとお。(24 盗まれた阿弥陀様 66 頁)

(70) そのリンが今も下田原の寺に残っちょっちゃとお《残っているんだって》。(1 三人のテンポつき 19 頁)

5.2.5 N1 の「場所」以外の用法

一人の話者によれば、時を表す、ムカシ《昔》、コッゾ《去年》、キンノ《昨日》、アシタ《明日》、サッキ《さっき》が N1 のとき、「N1 ノ」の他に、古くは「N1 ナ」を使っていたのを聞いたと言うことである。ただ、昔話の中にこうした例はない。もし、過去においてそうであれば、ナは「場所」の規定だけでは不十分といえる。相対的な時間表現に使われていた、という見通しであるが、それが、「場所」を表す用法からの一時的な「拡張」か、「時間」と「場所」の両方を表すことができたものから「場所」の用法に「縮小」したものか、現在のところ不明である。

白峰の昔話とその注釈¹

[7] 死人の握った金²

昔、牛首山^{うしくびやま}の出作り³に一人の娘がおって、この娘が十七、八の時^{ホリ}⁴から福井の方へ行つて雑仕奉公^{ぞうしほうこう}しちよったいとお⁵。そうしてない⁶、五、六年ほどたつと病^{やま}いが出たさかい⁷、自分^{アレ}が⁸家へもどって来たいって⁹。その娘は銭^{ゼン}を貯めちよったら¹⁰、もどる時^{ホリ}三兩余り貯まっちゃったので、大事に持ってもどって来たいとお。

この娘の病^{やま}いは労咳^{ろうがい}¹¹っていう病^{やま}いで、良うなったり¹²悪^{ワアル}なったり¹³しちよってなかなかおらんさかい、家で毎日寝たり起きたりしてズラズラ¹⁴と暮しちよったいとお。そのうち誰が言うともなしに、

「あの女^{メエロ}¹⁵は里^{さと}へ奉公^{ほうこう}しいに¹⁶行つて、でかいこと¹⁷銭^{ゼン}を貯めて来たいとお。」

-
- 1 以下に示す番号は、前稿の続き。本稿では〔7〕から。その他の形式は前稿と同じ。
 - 2 この話は、本書ではセクション番号 19 (49-53 頁) である。この話の末に、「白峰村の大道谷に在住の某家の娘にまつわる実話で、明治二十年代のこと」という記述がある。この話の伝承者、山下はつは、著者の鉦次郎の母で、明治 7 (1874) 年生まれ、昭和 34 (1959) 年没。はつ 13~22 歳ころの話ということになる。
 - 3 白山麓には昭和 30 年代まで焼畑農耕が行われていた。出作りでは山地の耕作地 (ヤマ) 付近に家屋を設けてそこで焼畑を営む。ヤマに住み続ける「永年出作り」と冬期に里 (ジゲ) にジャーマ《出山》する「季節出作り」の二通りある。
 - 4 オリ (をり) と関係あるだろうが、w > h の変化、あるいは h の挿入については未詳。
 - 5 「しちよったいとお」のシチョッタは動作継続過去を表す。イは指定辞ジャの異形態、環境に応じて、ジャ~チャ~イと交替する。トオは伝聞。
 - 6 ナイは間投詞、現在ではニヤ(一)という。
 - 7 サカイは理由を表すが、単なる契機を示す場合もある。~デ《ので》もあるが、サカイの方は、当然導かれる結果を導くことが多い。
 - 8 アレは《自分》の意味の再帰名詞。上代語ア (レ) に遡る。ガは所有の助詞。アレガで固定しており、アレノは用いない。
 - 9 「来たいって」のイは指定辞ジャの異形態。ツテは引用形式。
 - 10 「貯めちよったら」《貯めていたら》は、「三兩余り貯まっちゃった」《三兩あまり貯まっていた》に続く。
 - 11 結核のこと。
 - 12 「良くなる」はここではヨ一ナルで出ている。ヨイニナルともいう。
 - 13 「悪くなる」はワールナル。基本形ワ一リ、タ形ワールカッタ等、語幹に長母音をもつ。
 - 14 ズラズラは、標準語にない擬態語。ズルズル、ダラダラの混交か。
 - 15 メエロは《女》の意味。《雌》の意味にも使われる (cf. メーロノウシメ《雌牛》)。語そのものには見下す含意はない。《男、雄》はオノコ。
 - 16 「奉公しいに」などのサ変動詞スルの語幹シは長母音で現れる。
 - 17 デカイコトは《多く、たくさん》の副詞。量、数にも使用。「多い」は用いず、通常、デカイコトアルを用いる。形容詞はデカイ、デカイナ。

ちゅう評判があつたとお。そうしたらない、隣の人がじゃアしても¹⁸銭のいることができたって。しゃアに¹⁹、どこじゃしいも(どこへでも)²⁰借りに行けんし、隣の娘はでかいこと銭のこして来たいっちゅさかい²¹、しんぎゃアに(こつそりと)²²借りに行ってこう²³と思て²⁴、その娘のどこへ行って事情を話して、

「銭は出来次第、間違いなしに済す²⁵さかい。明年²⁶の春まで、二両ほどじゃ²⁷でも貸してくれられんこ(貸してくれないか)²⁸。」

ちゅうて頼んでみたら、

「おいや、人が、ただ、しゃアなこと言うてじゃ²⁹。何も銭ら³⁰一文もないじゃわい³¹。」

-
- 18 ジャーシテモは《どうしても》の意味。キヤー《こう》、ソー《そう》、アー《ああ》、ジャー《どう》。
- 19 シャーニは《そうに》。
- 20 ドコジャシイモは括弧にあるとおり、《どこへでも》の意味であるが、語形成と語源の詳細は不明。
- 21 「来たいっちゅさかい」は、キタ《来た》+イ《んだ》+ツチュ《つていう》+サカイ《から》。
- 22 シンギャアニは《内緒で》という意味。シンギャはシンガイ《新開》に由来。年貢を逃れるために内緒で開墾したことから。ガイ>ギャア>ギャの変化。シンギャダ《～田、地名》、シンギャゼン《～銭、へそくり》の語もある。
- 23 「行ってこう」の「こう」は「来る」の意志形。「来よう」のヨが挿入されない形。
- 24 オモフィテ>オモテ>オモテ>モテ。最終的にはオが脱落した。
- 25 ナスは《返済する》の意味。
- 26 ミヨニ。ミヨーニとも。おそらくミヨーネン《明年》から。音節が重重>重軽に変化し(cf. ゲンカン>ゲンカ《玄関》、ダイコン>ダイコ《大根》)、その後、ネ>ニの狭母音化。
- 27 「ほどじゃでも」で、指定詞ジャが見られるのは、「ほど(程)」が副助詞に文法化する前の名詞の姿を伝えるものか。
- 28 クレラレンコは、ラレは可能の意味。授受動詞クレルの語幹 kure- に、可能の助動詞 -rareru、否定のン、真偽疑問文につく疑問の文末詞コがついた形式である。直訳は「貸してくれることができないか」の意味。尊敬のレル・ラレルはこの方言にはない。《くれる》の意味の尊敬形式はクダサル。
- 29 動詞テ形+指定辞ジャ。ジャそのものが標準語のノダの意味をもち、「説明」のムードを伴う。アスペクト的な特徴としては、工藤真由美(1995)の枠組みでいえば、内的限界動詞(telic)は「結果」を、非内的限界動詞(atelic)は「継続」を表す。また「結果」の場合、その結果が後に影響を残したという意味合いをもつ。兄弟三人トモ結核デ死ンデヤ《死んでしまった(それが残念だ、それで苦勞したという気持ち)》。雪ガ降ッテヤ、道オアケンナラン《雪が降った、道を除雪しなければ(たいへんだ、という気持ち)》。cf. *雪ガ降ッテヤ、傘持ッテイケ(現在継続)。cf. 雪ガ降ッテヤ、傘持ッテイケ(チョル形ならばOK)。atelicな動詞の場合は、動作継続のチョルと区別が難しいが(今テレビ見テヤ/見テヤ、白峰ノコトガ出テヤ)、³⁰「見テヤ」が直前まで行われていた動作(=見テヤ)を表すことができる。ここでの「言うてじゃ」は現在他人がそのように噂している、という意味がある。前稿23頁「アルイテキテジャ」を「継続相」としたが、別の話者からこの含意は否定された。アルイテキテジャはtelicな動詞の「結

人に貸すような銭らあったら良い薬でも買うてのうで³²、早よこの病いをなおしちゃい
けっとわい³³（なおしたいんだがね）。」

ちゅうて初めの間は相手にせなんだいけっと³⁴、三べんも四へんも来て泣くように言うて
頼むもんじゃさかい、知らん人でもないし、^{アツマ}余れ³⁵気の毒な^キと思て、ついどうは（最後
は）二両の金を^{ミヨニ}明年の春までの約束で貸してやったいとお。

そのうちに日がたつて春になつたいて。借った³⁷人は、その娘のどこへ行って、

「いろいろ^{ホンベツ}分別（工夫）した³⁸じゃけっと、じゃしても金ができんで³⁹、盆にはきつと済
さかい、じゃアでも頼みます。」

ちゅうて頼むもんじゃさかい、仕方なしに待つてやることにしたいとお。

そのうちに娘の病いはだんだん^{オボ}重となつて⁴⁰いて、七月頃には歩くこともできんよう
になつてもたいいて。貸し金のことばっか心配して、

「早よ^ナ済してくれ、早よ済してくれ。」

ちゅうて寝言にでも言うもんじゃさかい、^{ふたおや}両親はこたえられん⁴¹ようになって、二日にあ
けず取りに行つたいけつとか、よっぽと金に詰つちよつたとめえて、

「まア、ちょこんとがいた⁴²（間）待つてくだされ、頼みます。盆には^{むじんこう}無尽講⁴³をとつて
必ず済しますで、どうか待つてくだされ。」

ちゅうちよつて、なかなか^{カヤ}返してくれなんだいとお。

果」と見る方がよいと思われる。アルイテキタジャは「完成相」と見ることに変化なし。
二つの意味のちがいは、アルイテキテジャは、動作やその経緯の説明ではなく、現在自
分がここにいる理由の説明に主眼があるかと思われる。

³⁰ いわゆる「ばかしのラ」、《銭など、銭のようなもの》。

³¹ 「ないじゃわい」のジャはノダの意味。ワイは自分の主張を一方向的に伝える文末詞。

³² 「のうで」はノーデで「飲む」のテ形。マ行バ行のウ音便。

³³ 「なおしちゃいけっとわい」はナオシチャは《治したい》+イ（ジャの異形態）+ケツ
ト《けれど》+ワイ（文末詞）。

³⁴ セ（シル《する》の未然形）+ナンド（過去否定）+イ（ジャの異形態）+ケツト《け
れど》。

³⁵ アンマレは《あんまり》の意味。

³⁶ キノドクナは終止形。いわゆるナ形容詞終止形はナで終わる。

³⁷ 《借りる》はカル。タ形はカッタ。

³⁸ 括弧にあるように、工夫することから、お金の工面の意味。現代語の「分別」とずれて
いる。

³⁹ デキンデのデは接続助詞テの異形態。「飛んで」のデと同じ。《ので》の意味のデとは別
であろう。

⁴⁰ 《重たい》はオボチャ。ナル形はオボトナル。オモイはあまり用いず、ここでも「病が
オボトナル」を使用。

⁴¹ コタエルは《我慢する》の意味。コタエラレンは《我慢できない》。

⁴² チョコント+ガ+アイダであつただろう。ガは現在、人間名詞にしか付かないが、広く
名詞一般に付いた時代の名残か。現在では～ガイダで一単位形式。

⁴³ 頼母子講（たのもしこう）と同じ。

そのうち、八月になったある日、雨のしも降る（細く降る）霞の立ちこめた人影の薄々とわかるくらいの晩げ⁴⁴時、娘はもうたまりかねたもんか、入口へ来て、ショボンと立って⁴⁵、

「じゃあでも、今日は金を済してもらいちゃじゃ。使者⁴⁶では、とても、らちあかんで、私⁴⁷もらいに来ました。済してくれるまで今日はもどりません。」

ちゅうて、今度は何ちゅうて申し訳⁴⁸してももどろっとせんじゃって。見ると、身体はやせて骨と皮ばっかで、顔は血の氣のない透き通った、おとろしような⁴⁹姿じゃって。よっぽど、こわい（つらい）⁴⁸のをこらえて、わざわざ来たもんじゃろ⁴⁹、可哀そうじゃ、何とかして金をこしらいてあげようと思⁵⁰て、

「じゃんなら、ちょこつとがいた⁵⁰、家へ入って待ちよって⁵¹ください。余⁵²れいたわしさかい、隣へ行⁵³って、トク借り（寸借）⁵¹して済⁵⁴しますさかい。」

ちゅうて出て行⁵⁵たいとお。出作り山じゃさかい、隣⁵⁶っていうても十町⁵⁷も離れちよっちゃさかい、なかなかわかにはいかんさかい、

「病⁵⁸いでこわい（つらい）こっちゃろ⁵³が、家へ入⁵⁹って寝⁶⁰て待ちよって⁶¹ください。」

ちゅうて勧め⁶²っちゃけ⁶³つと⁶⁴、家へ入⁶⁵ろ⁶⁶つともせず、ろくな返⁶⁷事⁶⁸もせん⁶⁹と玄関⁷⁰へウロンと立⁷¹って待ちよ⁷²つたいとお。

半時ほどた⁷³って、金を借⁷⁴って来⁷⁵て娘に渡⁷⁶すと、お⁷⁷とさ（黙⁷⁸って）⁷⁹受け取⁸⁰って暗⁸¹がりの

44 バングはヨケ《夕食》の後の寝るまでの時間。寝てからはヨサリ。

45 《立って》はタテッテという。石川、富山両県に分布。基本形はタテルか。基本形の存在が希薄な動詞の一群があり、これらはテ形を代表形としなければならない。タテッテ《立って》、カンデ《担いで》、テーデ《連れて》などが該当。テ形が中心であるので、チョル形《ている》、タ形（<タル<テアル）も自然である。タッテッテ、カンジョル、テージョル；タテッタ、カンダ、テーダ。

46 ツカイに由来。ツキヤと語末が短いのが普通であろう。Cai > Cja: は語末で短音化する。

47 「おとろしような」は形容詞＋ヨーナ。別に名詞＋ミタ＋ヨーナの形式もあり（ワレミタヨーナ《お前のような》）。ヨーナは用言の言い切り形につく。

48 コワイは《身体がつらい》の意味。

49 《来たものなんだろう》が直訳。

50 《少しの間》の意味。チョコット＋ガ＋アイダからか。

51 括弧にあるとおり、ちよつと借⁵¹ること。「疾く借⁵¹」からか。

52 約 1 km 強。

53 コワイコッチャロは《（身体が）つらいことだろう》。

54 勧め⁵⁴メツチャケツトは、勧め⁵⁴メツ《勧める》＋チャ（ジャの異形態、《ノダ》）＋ケツト《けれど》。

55 ヘンジ > ヘージ。

56 ゲンカン > ゲンカ。音節が重重 > 重軽に変化。

57 「おと」は《おとなしくしている、黙っていること》。『日本方言大辞典』上巻 415 頁（小学館）では、福井県、滋賀県に分布とあるが、白峰のようなサの付く語形の掲載はない。オットはおそらくオーシ、オーチ、オッチ《唾》等の他の方言の語形と関係する。

道をもどって行ったいとお。

「この間から、もう歩けんようになったちゅう話じゃったが、あァんなくても金は欲し^{ホウ}⁵⁸もん^メと見えて、使者^{ツキヤア}ではらちあかんと^モ思て、ありゃ^{アガ}自分で⁵⁹（自分自身で）取りに^モ来た。いたわし（可哀そう）もんじゃにや。」

ちゅうて話しながら、

「おかげで^{ヨケ}晩食⁶⁰が^{オソソ}遅⁶¹な^モった。」

ちゅうて^{ヨケ}晩食⁶⁰を^ク食て^ク寝よ⁶²っとし^クちよ^クとこへ、隣^{ヒキヤク}の^{ヒキヤク}人⁶³が^{ヒキヤク}飛脚⁶³に^{ヒキヤク}来^{ヒキヤク}たいとお。

「隣^ニの^ニ娘⁶⁴は、朝^ニげり⁶⁴から^ニ俄^ニに^ニ悪^ニう^ニな^ニって、今^ニ、ま^ニいら^ニっ^ニしゃ^ニった⁶⁵（死^ニな^ニつ^ニしゃ^ニった）で、ちよ^クと^ク知^クらしに^ク来^クた^クで^クご^クざ^クち^クゃ⁶⁶。」

ちゅうて^ク来^クた^クも^クんで、大^ク変^クび^クく^クり^クし^クて、

「えッ、それは^{ホノ}ほん⁶⁷の（本^{ホノ}当⁶⁷）で^クご^クざ^クち^クゃ^クろ^クこ⁶⁷。一^{イツコ}向⁶⁸ほん⁶⁸の（本^{ホノ}当⁶⁸）の^クよ^クう^クに^ク思^クえ^クて⁶⁹な^クり^クま^クせ^クん^クじ^クゃ^クが。」

ちゅうて、半^{マイ}時⁶⁹ほ^{マイ}ど^{マイ}前⁶⁹に^{マイ}金⁶⁹を^{マイ}取^{マイ}り^{マイ}に^{マイ}来^{マイ}た^{マイ}話^{マイ}を^{マイ}し^{マイ}たいとお。隣^{ヒキヤク}の^{ヒキヤク}人^{ヒキヤク}は

「そ^ソり^ソゃ、い^イか^イな⁷⁰嘘⁷⁰じ⁷⁰ゃ⁷⁰ろ⁷⁰が。そ^ソの^ソ時^ソ分^ソは、も^モう^モ死^シに^シか^シけ^シち^シよ^シる⁷¹最^{サイチ}中⁷¹で、皆^ナが^ナハ^ナラ^ナハ^ナラ^ナし^ナて^ナ見^ミち^ミよ^ミる^ミ時^{ホリ}じ^{ホリ}ゃ^{ホリ}さ^{ホリ}か^{ホリ}い^{ホリ}来^{ホリ}る^{ホリ}は^{ホリ}ず^{ホリ}が^{ホリ}な^{ホリ}い^{ホリ}じ^{ホリ}ゃ^{ホリ}ろ^{ホリ}が。」

つて^{ホリ}言^{ホリ}う^{ホリ}も^{ホリ}ん^{ホリ}じ^{ホリ}ゃ^{ホリ}さ^{ホリ}か^{ホリ}い^{ホリ}、何^{ナン}ち^{ナン}ゅう^{ナン}て^{ナン}も^{ナン}不^フ思^フ議^フで^フこ^フた^フえ^フら^フれ^フず⁷²、し^シゃ^シァ^シし^シと^シ、あ^ニの^ニ娘⁶⁴の^ニ幽^{ユウ}霊⁷³が^{ユウ}取^{ユウ}り^{ユウ}に^{ユウ}来^{ユウ}た^{ユウ}じ^{ユウ}ゃ^{ユウ}な^{ユウ}か^{ユウ}る^{ユウ}こ^{ユウ}と^{ユウ}思^{ユウ}う^{ユウ}と、ゾ^{ヒヤミズ}ッ^{ヒヤミズ}と^{ヒヤミズ}冷^{ヒヤミズ}水^{ヒヤミズ}か^{ヒヤミズ}け^{ヒヤミズ}ら^{ヒヤミズ}れ^{ヒヤミズ}た^{ヒヤミズ}よ^{ヒヤミズ}う^{ヒヤミズ}に^{ヒヤミズ}な^{ヒヤミズ}った^{ヒヤミズ}い^{ヒヤミズ}とお。

58 「欲しい」はホーシ。語幹に長母音がある。この方言のシク活用の形容詞はシで終わる（ウリシ《嬉しい》、サビシ《淋しい》）。ホーシはシで終わる形容詞で語幹に長母音をもつ。

59 「わがでに」に関係する。文献で「しん実から、我がでにも、よくがてんして」〈難波物語〉がある。方言でも「～ニ」の形をとるバリエーションがあるが、白峰のようなラで終わる例はない。

60 ヨケは《夕飯》。アサイ《朝飯》、ヒリ《昼飯》。

61 「遅い」の方言形は標準語形と同じオソイ、語幹の長母音は出ない。ただし、ナル形、タ形では現れる（オーソナル、オーソカッタ）。

62 「寝よ」は実際の発音ではニョであり、独立したヨはなかったはずである。

63 「飛脚」は「二人一組で行く死亡通知の使者」『日本方言大辞典』下巻 1991 頁（小学館）。

64 「朝げり」はアサギリともいう。夜が明けてからアサイ《朝飯》までの時間。

65 マイルは仏に対する丁寧語と思われるが、《死ぬ》意味では常にシャル敬語の形である。

66 「でござっちゃ」はデゴザッ《です》+チャ（ジャの異形態）。デゴザルはジャの丁寧。

67 ホンノジャ《本当だ》の丁寧ホンノデゴザルに、チャロ（ジャロ）+コが付いたもの。

68 「一向」のイツコー→イツコの変化は、音節が重重>重軽になる変化。

69 未然形+デの形。「～なくて」の意味。

70 「いかな」は「如何なる」のルを落とした形。《どんな》の意味。

71 サイチューから。音節が重重>重軽に変化。

72 《我慢できない》という意味。

73 ユーレーから。音節が重重>重軽に変化。

それから用意^{ヨイ}して、その人と一緒に^{シトツ}行つて見ると、家のもんは泣き泣き葬礼の用意^{ヨイ}し
るところじゃったさかい、^{とむら}弔いを言うと、

「お前に貸してある金を心配して、息を引きとるまで、あの金もろて来てくれ、良い薬
買うて来て飲うて⁷⁶早よなおしちやじゃ⁷⁷。早よ早よ、今行つてもろて来てくれちゅうて、
何べんも何べんも口ぐせのように言うちよつたが、今はもう夜になってしまいたいさかい、
明日朝げり早よからもらいに行つて、きつともろて来てやっさかい、まァちよこつとが
いだ待ちよつてくれえよう⁷⁸ちゅうて、なだめちよるうちに、苦しそになってきて、
一時^{シトツキ}ほど口をモグモグ^{イノ}動かし何か言おとしちよつちやけつとか⁷⁹、一向^{イッコ}言葉にならなんだ
でござっちゃわい⁸⁰。きつと金のこと言おとしちよつちやる⁸¹と思ひ⁸²ました。可哀^{カワイ}て
可哀^{カワイ}て、じゃアしょうじゃると⁸³思ひましたじゃ。それで明日は、あの金こしらいて持
つて来てくださされ。棺の前へ供えてやりちやァと思うさかいわい。」

つて言うさかい、大変びっくりして、

「その金は、今から一時^{シトツキ}あまり前に、あの娘がとりに来たさかい、隣からトク借りして
来て、たしかに渡したはずじゃが。」

ちゅうて事情^{おけ}を話したいけつとか、なかなか承知せんじやつて。

「しゃアな⁸⁴ことがあるもんか。今から一時前には息が切れかけて、ハクンハクンとし
ちよる^{ホリ}時で、しゃアな歩いたり、じゃして⁸⁵できましょに。お前は、あの娘^ニが死んだ
ので金を済さんつもりで、嘘^{うそ}のこと作つて無理を通そつて言うのか。」

74 「用意」をヨイという。ヨーイから変化したとすると、重軽>輕輕に例外的に変化したものか、ヨーイで超重音節を形成し、それが重音節(ヨイ)に変化したものか。

75 シトツニとはルビと漢字が示すとおり、《一緒に》の意味。ヒ>シの変化(他には、シト《人》)が見られるが、語彙的なものであろう。

76 ノーデは《飲んで》のマ行ウ音便。

77 「なおしちやじゃ」のナオシチャは《治したい》、ジャはノダで、《治したいんだ》。

78 「くれえよう」のクレルの命令形はクレだが、鉦次郎氏の記述では常に母音の長い「くれえ」で表記されている。命令形は本来語末母音が長かった可能性が高い。ヨウは丁寧さを表す文末詞。cf. シャンカヨー《そうですね》。

79 「しちよつちやけつとか」はシチョツ《している》+チャ(ジャの異形態)+ケツト+カ。《しているんだけれども》。

80 ナラナダ(過去否定)+デゴザツ(丁寧)+チャ(ジャの異形態《ノダ》)+ワイ(自分の主張)。

81 シチョツ+チャロ(ジャロ《のだろう》の異形態)。

82 「思い」をマイと言っている。類推で形成された形 oma-u のオが落ちて、基本形 ma-u ができた。その語幹 ma- に i がついた形。

83 ジャー《どう》+ショー《しよう》+ジャロ《だろう》。ジャーショー《どうしよう》、ジャージャロ《どうであろう》だけでも意味は通じる。ショーは意志、ジャロは推量が重なって現れる。

84 シャーナは《そんな》。

85 ジャーシテは《どうして》。

「いや、嘘ではござらん。^{ギラ}私が⁸⁶家のもんや金を借った家の人にも聞いてくだされ。何ちゅうても、済したことはほんの(本当)でござる。」

だんだん口論⁸⁷になって、娘の死骸⁸⁸をなかにして、「済した」「知らん」ちゅうて口論しちよると、娘の母⁸⁹も泣き泣き口論の仲間になっちゃったとお。そうしてない、何の気なしに死骸を見つめちよったら、右手に何かシッカリ握ちよるよう見えたいって。皆、びっくりして、ちょこんと指⁹⁰を開けて見ると、金を握ちよるので、余れなことに、

「やッ、これは。」

と思わず声をあげると、そこにいる衆らも皆⁹¹いっぺんに(一緒に)その手を見たいとお。たしかにさきに済した銭⁹²をそのなり⁹⁰握って死んじょっちゃって⁹¹。もう皆びっくりして、おっとさ(黙って)見ちよっちゃって。なかでも両親は肝つぶすほどびっくりしたいって。母は、

「この銭は皆、永代経にあげます⁹²さかい、じゃんか母⁹¹にかしてくれえよう。」

と生きちよる人に言うて聞かすように言うて銭をとったとお。そうして残らず永代経にあげましたとお。

(山下はつより伝承)

[参考] 白峰村の大道谷に在住の某家の娘にまつわる実話で、明治二十年代のことだという。

⁸⁶ ギラガは《私の》。ガは所有を表す助詞で人間名詞に付く。

⁸⁷ 「いさかい」から。isakai > isakja > isjakja > isjaka の変化。

⁸⁸ シビト《死人》から。bi > bu の変化。あるいは sjibito > sjibto > sjibuto の bi の母音が落ちたあと、u が挿入されたか。

⁸⁹ イネは《母》を指す語。自分の妻を指すのにも用いる。

⁹⁰ 「そのなり」は《そのまま》。

⁹¹ シンジョツ《死んでいる》+チャ(ジャの異形態)+ツテ(引用)。シンジョルは結果継続。

⁹² 永代経を上げてもらうのに使うということ。

[8] 二丁の鎌¹

昔、牛首²の人が勝山(福井県勝山市)へ買物をしいに行つたいとお。いろいろ^{ホウ}欲し³もんを、あれもこれもと^キ思てでかいこと⁴買うたさかい、かんで⁵(かっいで)行つたタミノ⁶へ入りきらんで、炭俵⁷を一枚⁸買って、でかいな荷物をつつんで、その上へ^{イユ}タミノのをせて、牛首むいてかんで行つたいとお。

そうしたらない、勝山を出る時^{オオソ}が遅⁹なつたもんじゃさかい、よっぽど道を急いだいけつとか、谷峠(白峰村と勝山市との境の峠)へ着いた時^{ホリ}には、早や薄暗^{ウスグロ}う¹⁰なつちよつたいとお。いっつも元気な人じゃつたいけつとか、割合に淋しがり^ヤ屋¹¹じゃつたもんで、こりゃ、暗^{クワロ}うなり¹²かけて弱つた、まッへつと¹³(もつと)勝山を早よ出りゃよかつた、灯し道具^{トゴ}¹⁴もないし、けつとか、これから下り一方じゃし、馴れた道じゃさかい淋しこともなかる、どりゃ¹⁵しゃんなら^{イユ}急ごうと気を励まして道を急いだいけつと、根が淋しがり^ヤ屋¹⁶じゃさかい、道端^{みちばた}がゴゾンツと音がしてもびっくりして足をとめ、冷汗^{ひやあせ}かきながらだんだん行くと、もう暗^{クワロ}うなつてもて、道^{みちべり}辺に木の生えちよらんとこは、まんまと¹⁷薄うんつと¹⁸道がわかっちゃけつとか、木の生えちよらんとこは、ちよこつともわからんじゃさかい^{あしさが}足探ね¹⁸に行くじやつて。気がいくら^{あせ}焦つてもなかなか早よ行けんじやつて。

1 この話は、本書ではセクション番号9(34-36頁)である。

2 牛首は、白峰村の中心、字白峰のこと。

3 ホーシ。「欲しい」の白峰方言の形。

4 「でかいこと」は《たくさん》。

5 カンデは《担いで》。基本形はカグか。基本形の存在が希薄な動詞の一群があり、これらはテ形を代表形とするべきである。他に、この種の動詞にはタテッテ《立って》、テーデ《連れて》などがある。

6 藁や茅で編んだ物入れ。同種で小型のものにドーランがあり、山菜採り(ハゲミという)などに用いる。タノミは平たくやや大型で物の運搬に適する。

7 俵はトーラという。tawara > to:ra の変化。

8 Cai > Cja: の変化。語末の場合、さらに短音化し-Cja となる。

9 「遅い」の方言形は標準語形と同じオソイ、語幹の長母音は出ない。ただし、ナル形、タ形では長母音が現れる(オーソナル、オーソカッタ)。

10 「暗い」はクーリヤ。ナル形はクーロナル。「薄暗い」の複合語でもウスグーロナル。ここでの表記はウスグーローナルと出ている。

11 ここでの「淋しがり屋」は「恐がり」のこと。

12 上記注10と同じ。現在は「暗くなる」はクーロナルであるが、ここでの表記はクーローナルである。語幹末母音の短音化 CV:CV: > CV:CV の変化があったものか。

13 マイトともいう。

14 提灯をさす。

15 ドレヤから。《どれどれ》の意味。

16 「うまうまと」から。《首尾よく、うまく》の意味。

17 ウスウント。独特の擬態語。《薄々と》の意味。ウスウントの表記か。

18 アシサガネは暗やみを足でたどること。

風が吹いて草木の動く影^{イノ カング}19を見てもギョッとして立ちどまり、また行くと大入道がスゴンと立ちよるよう見えさかい、よう見るとでかいな²⁰木の切り株じゃったりしっちゃって²¹、淋し淋しと思^モて五、六町も行くと、道端にズングリと真黒いでかいなもんが立ちよるさかい、ハッと息をこらしてよう見ると、道端に立ちよるでかいな石な²²じゃったって。何じゃ石なかと思^モて安心して一足二足歩き出すと、こんどは、スウッと風が吹いて来たさかい、自分が前^{ア レ}23の方を見ると、その大石な^{おおいし カング}影から、白い丸こい顔みたようなもんがスウッと出たり引っ込んだりしちよっちゃって。ただでさい^{キビ ワアリ}気味が悪い^モ24と思ちよるとこへ、しゃなもんが見えるもんじゃさかい、一心に幽霊じゃと思^モいこで²⁵しもて、手に持ちちよった杖^{ツレ}で、そこら^{へん}辺を無茶苦茶になぐりつけちよいて²⁶走りに走ったって。

そうして逃げ^ヌ27ちよるうちに、右^{ニギリ}28の尻を何かよう^{とが}突ったもんがチョキン、チョキンッと突き刺したって。その男はキャアッと呼ぼって²⁹、あわてて走りやはず³⁰（走れるだけ）走っちゃって。けっとか、走りや走るほど、なお、あらけの（強く）³¹突くじゃって。あしこで化けもんをなぐりつけたさかい、きつと怒って追うて来て尻を突くじゃと思^モうと、おとろして後^{うしろ}をふり向いて見ることもできんじゃとお。もう無茶苦茶に走ちよると、今度は左^{ヘダリ}の尻を突き刺したじゃって。そうして走るごとに、右をいっぺん、左をいっぺん、代わり代わりにチョキン、チョキンと突き刺したって。走れば走るほどあらけの（強く）突くじゃって。最早や生きちよる気もなしに、

「ヤァッ、大変じゃ、大変じゃ。助けてくれッ。」

19 カング。カゲではなく重音節をもつ。首里方言ではカーギと長母音が現れる。古い日本語で重音節をもつものだったものか。

20 「でかいな」は《大きな》の意味。数・量が多いことを表す副詞はデカイコト。

21 「しっちゃって」はシツ《する》+チャ（ジャの異形態）+ッテ（引用）。

22 「石な」は《石》の意味。「いしなご」から。

23 アレガマイは《自分の前》。アレは再帰名詞、ガは所有の助詞。所有の助詞はノ・ガ両方あるが、アレに付くのはガのみ。

24 「気味が悪い」はキビガワーリ。m~bの子音の交替がある。また「悪い」はワーリ。

25 モイコデはオモイコデからできた。語頭のオの脱落、さらに「思い込む」がウ音便で現れ、かつ短音化した。

26 「つけちよいて」は《つけておいて》。

27 ヌゲル。i>uの変化。これと同じ変化に、シビト>シプト《死人》ミセ>ムセ《店》がある。

28 「右」をニギリという。白峰では古い言い方。ヒダリの類推によって、ミギからミギリができ、さらにニギリに変化した。手の「握り（ニギリ）」の引かれた変化であろうか。

29 《声をあげてさけぶ》ことはヨボルという。ヨブは《人を招待する》意味。

30 ホズは《だけ》の意味。「走りや走るホズ」《走れば走るほど》など。

31 「荒けなし」《荒々しい、乱暴だ》から。白峰ではアラケノは《強く》の意味。

って死に声³²出して一散に走っちゃけっとか、右の尻と左の尻を代わる代わる突く手をゆるめてくれんじやって。息も絶え絶えになって自分^アが家のなかへ飛び込^コんで、ブツつぶれてしめたいとお。着物^ベ^エ³³は汗でズブズブに濡^シて³⁴もて、尻からはガラガラと血が流れちゃって。家の人らは介抱^モ^リしいながら調べて見ると、股引の尻が両方ともズタズタに破れてしめて、いっぱい、血が流れておとろしように³⁵なっちゃって³⁶。わけがわからず介抱^モ^リしちよると、明日の朝げり、やっと正気になったさかい、きいてみたら前^まのような話じやって。

そこで荷物を調べて見たら、勝山で鎌を二丁買って炭俵のなかへつつんだのが、走る拍子に二丁なら³⁷俵の間から下^{さが}って、走りゃ走るほどあらけの(強く)尻を突くじやったいとお。それから幽霊^{ユウレイ}が出たちゅうとこへ行って見ると、ネリカワっていう木の白い花が散々にただかれて散らばっちゃったいとお。ネリカワ³⁸ちゅうのはノリウツギっていう和紙の原料^{もと}にしる木で、若木^{わかぎ}はようのびて、三、四尺ほどのものびて、頭^{あたま}にアジサイによう似た白い花の咲く木で、その花が風にゆられて出たり引っ込んだりしちやったいとお。それでそうらいきり³⁹。

(山下兵四郎より伝承)

32 シニゴエは「死にそうな声」という意味であろう。

33 ベーは《着物》の意味。衣類一般を指す。

34 《濡れる》はシネル。撥音で始まる語。撥音で始まる語は他に、シナ《皆》、シナ《赤ん坊》、シニヤコイ《柔らかい》など。

35 様子を表すヨーニは用言の基本形につく。オトロシ《形容詞、おそろしい》+ヨーニ《様子に》で、《恐ろしい様子に》の意味。

36 《なっているんだって》の意味。ナツ《なる》+チョツ(チョル、《結果》)+チャ(ジャの異形態、《ノダ》)+ツテ(引用)。

37 ナラは《ともに》の意味。cf. 「二人なら」《二人とも》。

38 ネリカワは後の解説にあるように、ノリウツギのこと。雁皮(手漉き紙)を作るとき、漉く水の中に入れるネリ(粘り)に使われる。花は白く、ガクアジサイに似る。

39 白峰民話の結末句。いわゆる「そうろう系」。このあと、カンドメナシ、あるいはガンドメノアシが続く。ここでは省略された短いかたち。発端句はムカシムカシ、アツタイトオだが、この話には用いられていない。昔のいつかどこかの話ではなく、実際に伝わる実話という設定だからであろう。

[9] 日本一の尻こき爺さ¹

昔々、あったいとお²。爺さ^{じい}と婆さ^{ばあ}とおったいって⁴。爺さない⁵、山から雀一羽つらまいて⁶来て可愛がって可愛がって飼うちよった⁷いと。それで、よう馴れて、前(家の外)へ遊びに出ておっても爺さの姿を見と喜^{ヨロコ}で⁸飛んで来ては、手へでも頭へでもとまっちゃったいとお⁹。

そうしたらない、ある時、雀やなア、

「爺さや、いっつも¹⁰私^{ギラ}¹¹を大変可愛がってくれて、ようしたいよう(ありがとう)¹²。お礼返し^{ガヤ}に¹³一つ銭^{ゼン}も^{オソ}うけを^{オソ}教えてやっさかい、私^{ギラ}が言うようにしてみいよ¹⁴。それはなア、私^{ギラ}を爺さが禪^{かんどし}¹⁵のなかへ入れて、そのなり¹⁶日本一の尻こきじゃって、殿様の前を通ってみいよ。しゃっしとなア¹⁷、ちょうど爺さが尻こくように、うまいこと鳴くさかい¹⁸。しゃっしと、きつと殿様、上手な尻じゃって喜^{ヨロコ}で^{ほうび}褒美を^{ほうび}くださるにちがいないさかい

1 この話は、本書ではセクション番号 57 (141-144 頁) である。この話は「鳥呑み爺」の一種。鳥を呑むのではなく、禪の中に隠し持つタイプ。鉦次郎の妹、織田きく(1915-2005)が語る話では、シンジガラ(蟬)を飲み込む話になっている。本文末にある伝承者山下たまは鉦次郎・きくの祖母にあたる。

2 白峰民話の発端句。いわゆる「昔々系」。アツタイトーのように、存在のアツタを用いる。イは《ノダ》の意味をもつジャの異形態。トーは伝聞。

3 ジーサマ、ジーサ、ジー《爺》/バーサマ、バーサ、バー《婆》の順で階層が下がる。《爺》については、ノンサ、ノノの別の語があり、階層的にはジーサ、ジーに相当する。

4 発端句と対照的に〜ト〜トオツタイツテとなる。人の存在にオツタを用い、末尾はツテの引用形式。

5 ナイは間投詞。現在のニャー、ニャのもの形。

6 「とらえる」と「つかまえる」の混交語。

7 「飼う」はコー。コー Chol は《飼っている》の動作継続(進行)。

8 マ行バ行のウ音便をもつ。「喜ぶ」のテ形「喜んで」はヨロコーデとなり、さらに短音化してヨロコデとなる。

9 「とまっちゃったいとお」のトマツ《止まる》+チャツタ(ジャツタの異形態)+イ(ジャの異形態《ノダ》)+トー(伝聞)。「動詞+ジャツタ」で回想を表す。全体で《止まるものだったんだって》が直訳。

10 「いっつも」《いつも》は常に促音があるかたち。

11 白峰方言の自称詞。男女の区別なし。「以下ら(イゲラ)」から来ているものか。

12 ヨーシタイは「ありがとう」に相当する。おそらく「よくした+イ(ジャ)」から。ヨ一は丁寧さを表す文末詞。

13 「お礼返し」の複合語。「返す」はカヤス(cf.「返る」はカヤル。「変える、帰る」はカエル〜カイル)。

14 ミルの命令形ミー。それにヨの文末詞。

15 「爺さが禪」には所有のガが用いられている。

16 「そのなり」は《そのまま》。

17 「しゃっしとなア」は《そうすとなあ》。

18 「さかい」は「から」に相当。この文は「さかい」で完結した文。

よう¹⁹。」

って言うて聞かしたいとお。それで、爺さ、^{アレ}自分が²⁰かいちよる^{ふんどし}禪のなかへ雀を入れて、殿様がお城から出てござる²¹前をウロウロ歩いちゃったいってにゃ。家来衆やびっくりして、

「そこを通るは²²何もんじゃ。」

ちゅうてとがめたさかい、すかさずになァ、

「日本一の屁こきじゃ。」

ちゅうたいってにゃ。殿様なァ、

「そんなら、一つこいてみい²³。」

って言うたいって。そこで爺さ、足をふん張って、ソッと禪のなかの雀に合図したらなァ、チチン、ピヨドリ、コガネジャックリ、ジャックリ、ノノガカネカネ、ジンジガラガラ、トノナガレス、プップッ、プップッ²⁴、

ちゅうて鳴きたいとお。聞いた殿様は、

「こりゃ上手な屁じゃ。もう一つこいてみい。」

そこで、また合図すると、

チチン、ピヨドリ、コガネジャックリ、ジャックリ、ノノガカネカネ、ジンジガラガラ、トノナガレス、プップッ、プップッ、

ちゅうてこいたいとお。殿様も家来衆も、

「見事、見事。日本一の屁こきじゃ。」

^{シナ}皆、手をただいて²⁵誉めはやして、褒美の金やら結構な^{ケッココ}²⁶着物^{ベエ}²⁷やら一ぱいもろて、喜^{ヨロコ}^カで担^カんで²⁸もどったいとお。

そうしたらない、隣の欲の深^{フク}さ²⁹婆さ、でこけなるて³⁰ (大変うらやましくて)、自分が家^{アレ}³¹

19 これも「さかい」で完結した文。「よう」は丁寧さを表す文末詞。

20 アレは《自分》という再帰名詞。ここでのアレガのガは後のカイチョルの動作主を表す。

21 「出てござる」のテゴサルはチョル（くておる）の尊敬。《出ていらっしゃる》の意味。

22 「そこを通るは」では準体助詞ノがない。連体形の準体用法。

23 「みる」の命令形。

24 チチン（擬声語）、ピヨ鳥（擬声+鳥）、黄金ジャックリジャックリ（擬声語）、爺ガ（ノノの）金々、ジンジガラガラ（蟬）、トノナガレス（鳥の～、不明）、プップッ、プップッ。

25 「叩く」はタダク。

26 ケッココは《綺麗な》の意味。

27 《着物》をさす一般的な語。

28 カンデは《担いで》。基本形ははっきりせずほとんど用いない、カグカ。

29 「深い」はフーキヤ。標準語 3 拍の形容詞語幹は長母音をもつ。-Cai > -Cja（フーキヤ）、-Cui > -Ci（サービ《寒い》）など。

30 「でこけなるて」のデコは「でかい」に関係し《大変》の意味。ケナルテは、ケナリ（く

の爺さを叱って、

「ほかの、ノノ（爺）ら³²は尻こいても金とる。家のノノらは糞ノノじゃ。」

ちゅうて爺をせめて手にゃわん³³ようになったじゃって（手におえなくなったということです）。

爺さ仕方がのうて、尻こき爺さがとこへ行って³⁴習てこう³⁵と思て、

「しゃんなら、あのノノがとこへ行って、じゃアしてしゃアな尻こいたじゃ、聞いてこうわい³⁶。」

ちゅうて隣の爺がとこへ問いに行ったいって。

「もう、家の婆叱って手にゃわんじゃが、じゃアすると、しゃアな上手な尻がこけるなら（尻がこけるのですか）³⁷。一つ教えて³⁸くれんこ（くれませんか）³⁹。」

「フム、婆が叱るこ（叱るのか）。しゃんなら教えてやるんね⁴⁰。それはない、でかいこと小豆飯を炊いて腹いっぱい⁴¹食て、尻へ⁴²出そになったら大根の尻っぽを詰めて⁴³行くとよいじゃわい。」

ちゅうて教えてくれたいとお。それから家へもどって、小豆飯をこしらいて⁴⁴ドッサリ食て、尻へ大根の詰めして、あらけの（荒々しく）⁴⁵歩くと出っさかい、ソッソッと歩いて行って、

ケナルイ）《うらやましい》のテ形。

31 「あれが家」は《自分の家》。アレは再帰名詞、ガは所有、「家」はイエと読む。ウチであれば、家屋の意味。《一族、一家、家庭》を意味するのはイエで区別する。

32 複数のラではなく、いわゆる「ぼかしのラ」。ノノラは《爺など》。

33 テニャワンは「手に合わない」から。ここでは《手が付けられない》の意味。

34 《尻こき爺さのところに行って》の意味。

35 ナローテ>ナロテ。コーは「来る」の意志形。コヨーのようにヨが入らない形。

36 「じゃアして」「どうして」、「しゃアな」「そんな」、尻こいたじゃ《尻こいたのか》、聞いて《聞いて》、こう（「来る」意志形）、わい（自分の主張）。疑問語疑問文の場合、文末に「ナラ（ナー）」がくるが、それが節に入ると「[疑問語…ジャ] 述語」の形をとる。

37 《どうするとそんな尻がこけるか》の意味。本文括弧にあるような敬語的な要素はない。ナラは疑問語疑問文に用いられる文末詞。

38 「教える」をオソエルというのは、おそらく古語「をすへる」から。オソエル>オソエルと変化したものであろう。

39 コは真偽疑問文に用いる文末詞。「～てクレンコ」《てくれないか》。本文括弧にあるような敬語的な要素はない。

40 ンネは「言い聞かせ」の文末詞。動詞意志形+ンネでは自分の意向がこれから実現することを相手に言い聞かせるときに用いる。「しゃんなら今から梯子尻ちゅうのをこいてみしょ《見せよう》んね」（41はしご尻43頁）。他に、ジャ+ンネもあり。この場合、説明を言い聞かせるときに用いる。「このゴザを買うて来た《買って来た》い（ジャの異形態）んね」（37ムジナめと猿め108頁）。

41 ハラーイッパイと発音したものか。

42 この方言で「デル《出る》」がとる補語には、エ格がある（例：学校エ出ル）。しかし、ここでは、デエソ（語幹デー《出》+ソ《そう》）のデルの主体になっている。

43 「詰めて」は《栓して》の意味。

44 コシライルは「作る」にあたる語。ツクルは農作物、酒などに対して用いる。

45 「あらけなし」から。白峰のアラケノは《強く》の意味の副詞だが、ここでは《力をこ

殿様のござる⁴⁶のを待ちよったいって。そうしたらない、殿様、行列してござったいとお。爺さ、それ今じゃと思て、行列の前へ出て行ったら、

「そこを通るは何もんじゃ。」

「日本一の尻こきじゃ。」

「昨日の尻は聞きごと⁴⁷じゃった。も一つこいてみい。」

爺さ、しめたと思て、精いっばいでかいな⁴⁸尻をこいて、よけい褒美をもろていこと思て、尻を捲^{まく}って、ウウンッと下腹^{ソソバラ}に力を入れてカんだ^{ジキ}⁴⁹いってにゃ。そうしたらなァ、大根の詰めがスポンッとぬげてない、糞^{フク}⁵⁰がでかいことベタベタッと出たじゃって。そうしたらなァ、殿様、大変怒って、

「これは偽せもんじゃ、フチただいで⁵¹やれッ。」

ちゅうたいって。大勢の家来衆^{アツ}ら集^{アツ}ばって⁵²来て、手に持ちよった槍の尻でなぐりつけたいって。爺さ、身体中^{からだじゅう}なぐられていっばい血が出て、着物も何も血だらけになって、真赤に染まって命ガラガラ⁵³逃げてもどって行ったいって。

そうしたらない、欲^{フク}の深きや婆さ、ノノ(爺)ァ今に褒美もろてもどってくっちゃろこ⁵⁴、早よ来りゃよいににゃと思て、二階^{ヤネ}⁵⁵へ上って窓^{セド}⁵⁶へのぞい⁵⁷てみたら、爺や⁵⁸血だらけになって泣き泣きもどってくっちゃって。けっとか、遠目^{とおめ}に、赤い結構な^{ベエ}⁵⁹着物着て金担^カんで⁶⁰くるように見えっちゃさかい⁶¹、もう嬉^{ウリ}して嬉^{ウリ}して⁶²二階で踊り出したいって。

めて》の意味。

46 「来る」に対応する本動詞ゴザル。尊敬を表す。

47 「聞きごと」は《聞くに値するほど》素晴らしい》。「見ごと」が《(見るに値するほど)素晴らしい》に対応する。

48 「でかいな」は《大きい》の意味。終止形、連体形も同形。

49 リキンダ>ジキンダ。語彙的な変化。

50 バーは《糞》。アクセントはHLで、バーHH《婆》と対立する。2拍の親族名詞はノノ・ジー《爺》、トト《父》、カー《母》はすべてHLである中で、バー《婆》だけがHHで例外的。バーHL《糞》との同音衝突を避ける形になっている。

51 「ぶちただく」。「ぶつ」と「ただく《叩く》」の複合動詞。

52 「集まる」をアツバルという。m~bの交替。サービ《寒い》など。

53 「命ガラガラ」。この方言ではカラガラではない。

54 クツチャロコは《来るのだろうか》の意味。クツ《来る》+チャロ(ジャロの異形態)+コ(真偽疑問文の文末詞)。

55 ヤネは《二階》をさす。

56 セド(背戸)に「窓」の字を当てるが、ヤネにある窓の意味で「戸」ではない。

57 この方言では「覗く」は「~エノゾク」とエ格をとる。

58 ヤはトピックを表す助詞。

59 ケッコナは《よい》の意味。「良い意味」の内容は広く、《綺麗な、美しい、清潔な》など、この一語が表す。反意語はミーニキ《見た目が悪い》、キタニヤ《汚れている》、ネンドナ《不快を与える》など、意味区分が細かくなっている。

60 「金かんで」は《金を担いで》の意味。

61 《見えるのだから》の意味。見エツ+チャ(ジャの異形態)+サカイ。

「ノノ（爺）^{アアカ}ア赤い^{ベエ}⁶³着物着て金担^カんで来るわ。チャッチャッチャッチャッ。ノノ（爺）
ア赤^{アアカ}い^{ベエ}着物着て金担^カんで来るわ。チャッチャッチャッチャッ。」

ちゅうて踊っちよったいとお。それで、そうらいきりのかんどめなし⁶⁴。

（山下たまより伝承）

⁶² 「嬉しい」はウリシ。シク活用の形容詞はシで終わる。カナシ《悲しい》、サビシ《淋しい》。

⁶³ アーカイとなっている。標準語3拍形容詞は、CVCVaiにはCV:Cja（アーキャ《赤い》）、CVCuiにはCVCi（サービ《寒い》）が対応をする。語末ではいくつかの語で、Cai > Cjaの変化を起こしている（フチャ《額》、イチミヤ《一枚》など）。アーカイは上記の口蓋化の変化を起こす前の形であり、ここでも語幹の長母音が見られる。この形は語幹の長母音がなぜ生じたかの問題にとって重要である。形容詞全般に、語尾の融合変化と短母音化の二つの変化が起こったが、それに伴って語幹母音が長音化したのではないことを示唆する。すなわち、語尾の音変化以前にすでに語幹母音は長かったのである。

⁶⁴ 白峰民話の結末句。いわゆる「そうろう系」。「そうらいきりのかんどめなし」の他に、「そうらいきりのがんどめのあし」がある。「がんどめのあし」はガンドメ《蟹》のアシ《足》で、蟹の足を連想し、そこで切る（話を打ち切る）意味がある。

参考文献

- 稲田浩二（1988）『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』同朋舎出版
- 岩井隆盛（1959）「白峰（牛首）方言概要」『白峰村史 下巻』白峰村史編集委員会編：276-321
- 岩井隆盛（1962）「白峰方言の分布と変化」『白峰村史 上巻』白峰村史編集委員会編：425-451
- 小倉学編（1974）『全国昔話資料集成4 白山麓昔話集』岩崎美術社
- 小倉学・山下鉦次郎編著（1963）『白山山麓 白峰の民話』石川県図書館協会
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現—』ひつじ書房
- 国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図』1、大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編（1994）『方言文法全国地図』3、大蔵省印刷局
- 佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版
- 真田信治（1990）『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版
- 土井忠生・森田武（1975）『新訂 国語史要説』修文館
- 徳川宗賢監修（1989）『日本方言大辞典』（全3巻）小学館
- 新田哲夫（2005）「白山麓白峰の昔話の伝承—ことばと語り手—」『はくさん』（石川県白山自然保護センター普及誌）33-3: 6-9
- 新田哲夫（2006）「石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化」平成 16-17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究報告書（課題番号 16520275）
- 新田哲夫（2009）「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』1: 15-56
- 宮島達夫（1956）「文法体系について」『国語学』25: 57-66
- 山下鉦次郎（1965）『山下忠治郎家諸雜事記』（私家版）